

委員会報告

口腔衛生関連用語に関する提言

日本口腔衛生学会 用語委員会

小関 健由¹⁾ 加藤 一夫²⁾ 佐藤 勉³⁾ 千葉 逸朗⁴⁾

口腔衛生会誌 63 : 463-464, 2013

第1回 齲蝕（う蝕）に関する用語について

日本口腔衛生学会用語委員会では、口腔衛生学・予防歯科学領域の用語の整理を進めておりますが、混乱を招く可能性のある類出用語や定義が曖昧な用語が散見されます。そこで、それらの用語を集めて整理し、用語の使用に関して日本口腔衛生学会での考え方の提案をまとめ、学会誌の誌面をお借りして学会員の皆様に広く問題提起してご意見をいただくことにしました。ご意見は、本学会用語委員会宛に顕名でお送り下さい。

第一回目は齲蝕に関する用語で、平成23年に用語委員会の報告¹⁾として掲載したもののうち、論点となる齲蝕に関する用語を改訂、再掲します。

齲蝕，齲齒（歯科医学学会学術用語集，歯科医師国家試験出題基準）

う蝕，う齒（学校歯科保健，歯科医学学会学術用語集，歯科衛生士国家試験出題基準）

現在まで、口腔の疾病の一つとして「齲蝕」を用いるのが通例であり、診療録および診療報酬明細書では齲蝕症（疾患名）を用いている。学校保健安全法施行規則や施行令では同じ意味で「齲齒」を用いているが、本学会では口腔の疾病の一つとして「齲蝕」を用い、齲蝕のある歯を「齲齒」とする。また、医療系大学間共用試験実施評価機構のCBTではディスプレイの解像度の事情から「う蝕」を使用している。現行の歯科医師国家試験出題基準では基本的に「齲蝕」を用いる。原典が統計資料等に関連していて、「う蝕」と記載されている場合には原典に沿って「う蝕」を用いるという考え方を示したい。ちなみに、厚生労働省医政局歯科保健課所管の歯科疾患実態調査では「う蝕」を昭和32年当初より現在

に至るまで用いており、現在も歯科保健施策の通知では「う蝕」を用いることが多いが、保険局医療課は「齲蝕」を用いている。

齲《う》蝕有病者率（歯科医学教授要項，日本歯科医学学会学術用語集）

齲《う》蝕有病率（日本歯科医学学会学術用語集）

齲《う》蝕経験歯数（日本歯科医学学会学術用語集）

齲《う》蝕罹患率（齲蝕+罹患率，日本歯科医学学会学術用語集では，齲《う》蝕罹患型の用語が掲載されているのみ）

齲《う》蝕被患率（文部科学省学校保健統計調査）

*《》は、その前の語または文字と適宜に置き換えて良いものを示す。

齲蝕は自然治癒がないという性質から、齲蝕有病（prevalence）、齲蝕発病（発生、発症、incidence）という表現以外に、齲蝕経験（experience）という用語が広く使われている。DMFとの関係でいえば、齲蝕経験はDMFのすべてであるのに対して、齲蝕発病（発生）は、一定期間に発生した齲蝕を示すものと考えられる。齲蝕罹患率は齲蝕発病率と捉えるべきであり、齲蝕有病率とは異なる概念である。なお、齲蝕罹患率は母子歯科保健で用いる特別な用語とすべきである。

一般的に有病率は一時点における疾病を保有していた者の割合を指すが（時点有病率：疫学事典²⁾）、齲蝕では齲蝕経験者の割合とする場合が多い。よって齲蝕有病は、検査を行った際に罹病している状態を表してDのみと解する考え方や、これにFやMも含むという考え方もあるが、一般的に齲蝕有病者率を用いる際にはDMF者率と考える。学校保健統計では、一定の時点で疾病を有している者の割合を被患率と表現しているが、これは時点有病率と同じものである。齲蝕に関しては、

¹⁾ 東北大学大学院歯学研究科予防歯科学分野

²⁾ 愛知学院大学歯学部口腔衛生学講座

³⁾ 日本歯科大学東京短期大学

⁴⁾ 北海道医療大学歯学部保健衛生学分野

乳歯と永久歯を区別せずに齲蝕経験者率を「う歯の被患率」と表現している。

齲蝕の感受性は、歯種や部位で大きな差が存在することから、一般の疾患と異なり“者”以外に、“歯”や“歯面”という単位も取り入れないと齲蝕についての表現が適切にできない。そこで、こうした単位が齲蝕の状態と組み合わせて使用されている。

D歯率（あるいはF歯率，M歯率）（新予防歯科学，新口腔保健学）

D歯率の説明として、「新予防歯科学」³⁾ではD歯率 = D歯数 / (総被検歯数 + 喪失歯) × 100 と D歯率 = D歯数 / DMF歯の合計 × 100 の両者が掲載されている。しかし前者のみ⁴⁾または後者のみ⁵⁾を掲載するものもあることから、D歯率は状況によって、D歯数 / 喪失歯を含む被検歯数とD歯数 / DMF歯数が使い分けられているようである。したがって、D歯率という用語の使用にあたっては、分母を明確にするべきである。なお、歯科医師国家試験出題基準、歯科医学教授要項、歯科医学会学術用語集などにはD歯率の記載はない。DMFという用語を提案したKleinら⁶⁾は、齲蝕治療のニーズに関連して、F歯率（Percent of DMF permanent teeth that are filled）という表現で、DMF歯に対するF歯の割合を考えているが、D歯率やM歯率に当たる表現は使われていない。M歯率は、年齢や抜去理由も考慮する必要がある。

結 論

以上より、

1. 齲《う》歯と未処置歯の違いを明白にし、齲《う》蝕（歯）はD, M, Fを含む齲《う》蝕経験（歯）を表す。
2. D歯率，M歯率，F歯率という言葉は、分母を明白にして用いる必要がある。
3. 「齲蝕罹患率」は齲蝕有病（者）率と同義には用いない。
4. 「う蝕被患率」という表現は本学会では用いない。

文 献

- 1) 千葉逸朗，尾崎哲則，加藤一夫，日野出大輔，平田幸夫，葭原明弘：用語委員会報告 口腔衛生関連学術用語の統一に関する見解。口腔衛生会誌 61：318-328，2011。
- 2) Porta M：日本疫学会（訳）：疫学事典，財団法人 日本公衆衛生協会，東京，第5版，2010。
- 3) 米満正美，小林清吾，宮崎秀夫，川口陽子（編）：新予防歯科学，医歯薬出版，東京，第3版，下巻，2003，246-247頁。
- 4) 末高武彦，零石 聰，安井利一，前野正夫，山下喜久，廣瀬公治（編）：新口腔保健学，医歯薬出版，東京，第1版，2009，58頁。
- 5) 島田義弘，前田 博：歯科用衛生統計学，医歯薬出版，東京，第1版，1969，10頁。
- 6) Klein H, Knutson JW: Studies on dental caries. I. Dental status and dental needs of elementary school children. Public Health Report 53: 751-765, 1938.